〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(8)〉

観察することとイメージすること

植村朋弘

幼稚園での観察

デザインを専門分野とする者にとって、幼児を観察する体験は、「イメージするということ」への新しい気づきを与えてくれた。そのことについて述べようと思う。お茶の水女子大学生活科学部で開講されている「保育臨床実習」という授業において非常勤講師としてかかわることになった。期間は半期週一日二コマの授業であった。一時限目に幼児の活動の様子を観察し、二時限目にその内容について発表しディスカッションするという形式で行われた。幼児を観察することは、初めての体験であり、当初から若干の戸惑いを感じていた。また幼児を観察する目標も、自分の中では決して明確だったわけでなく、興味としては、幼児が遊びの中でどのように他者や道具とかかわり展開していくのか、ということだった。これを前提に、幼児の観察について、デザイン行為

としての観察との違いを踏まえながら、イメージという共通のはたらきについて述べる。

観察の方法

観察の目的は、幼稚園もしくは保育園に赴き、その中で幼児達の活動を観ること、保育者の幼児へのかかわりを観ることを通して保育について考えていくことである。観察の方法は、幼児や保育者とは直接かかわらないよう、話しかけることなく、ただ起こっている現象そのものを精査することだった。そして、そこで感じ取ったこと考えたことを小さなメモ用紙にテキストや簡単な絵にして書き留めることだった。それは可能な限り幼児たちにとって自然な活動ができるよう注意を払うこと、保育の邪魔にならないことを極力重視したからである。よって写真撮影や録音・録画も行わなかった。それは幼児たち・保育者への当然の配慮だった。

とはいえ、幼児の観察を始めた時、戸惑いを感じたのは、「観察者自身が幼児や保育者と会話することができない」ということだった。観察者は観察している状況において、自ら発する問いかけと、それに対する答えを手がかりに、その行為や発話についての意図や意味を見いだすことができなかったのである。そこで何が観察できるのか、まさに雲をつかむように漠然と感じていたのである。幼児たちがどのように他者とかかわりながら活動しているのか、何を考えているのか、それに対して保育としてどうかかわるべきなのか、観察したこと、目の前で起こっていることの意図や意味について確信をもったとらえ方ができないように感じていたのである。

デザインとしての観察について

それは、デザイン開発での観察と一見違っているように思われたからである。デザインとは、生活の中で人々が見たり、使ったり、考えたりなどさまざまな活動を支えるために、機能的でわかりやすく美しい形や色を与え秩序づけていく行為である。それとかかわる人々にとって、より豊かに心地よい環境と活動をもたらしていく。

デザインにとっての観察は、基本的には次のようなかたちで行われる。たとえばデザイナーがある道具をデザインする場合、使い手「ユーザー」と道具や環境との関係をとらえながら、活動の過程を観察していく。その時デザイナーは、ユーザー自身が遂行している思考や行為について、何を意図しているのか、どのような問題が起きているのか、どのような手段や方略を使おうとしたのかなど、できるだけ具体的に包括的に状況を把握していく。そのために観察者である「デザイナー」は、ユーザーに対してその状況を踏まえながら、聴き取りを行い、問題を明らかにしていく。場合によってデザイナーは、ユーザーになりきって、ユーザーの立場から反芻し、問題をとらえ直していく。ユーザーになってみて自分の目やからだで確かめ感じていくのである。それを手がかりにどのような思考や行為を支援すればよいのか、現実にまだ存在していない適正な形やはたらきを「イメージ」しながら解決しようと、具体的な形を創り上げていく。デザイナーは、ユーザー自身がまだ気づいていないことも含め、深い見識と洞察力をもって問題を発見していく。デザイナーとしての構想力(イメージ力)や創造力が要求される。

幼児の観察を通して

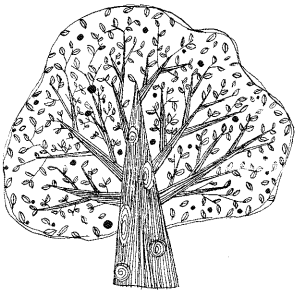
観察結果の発表は、次のような方法で行われた。発表者は、観察時に記録したメモをもとに発表していく。その場に居合わせていないほかの学生たちは、その話を手がかりに観察内容を理解していく。この理解していく手だてが、イメージすることなのだ。その発表者が話す状況や、幼児とその人数、そこに居合わせた保育者などの様子をもとにストーリーを構成していく。ちょうど、文学作品を読みながら、もしくは、人からある出来事のストーリーを聴きながらイメージしているようにである。しかしイメージの内容は、発表者と発表を聴いている他者との間に必ず隔たりがある。その場で発表者と同じ状況を観察していない限り、決して同じ状況をイメージすることはあり得ない。他者である聴き手は、発表者の話

を手がかりに再構成していくしかないのである。

他者が観察した内容を聴くことは、実感をもちにくい話のように思われた。一見理解に満足感がもてないように感じられたのである。また話を聴くことによって、自分の観察したこととどのように関係しているのかについての確信も得られにくいように感じられた。ここから何を学べるのかが、授業の中での自分自身への問いでもあった。とりあえず学生たちが話す内容を理解できるように、その様子を観察者に質問していくしかなかったのである。質問を投げかけると、発表者である観察者は、思い返しながら答えていく。その時の状況をもとに「そういえば～だったと思う」という本人自身があまり気づいていなかった内容を、指摘されることで出来事を思い出していく。質問を投げかけられることは、観察者にとって大切なことで、観察した内容についての気づきを与えられていく。このように発表者と聴く側との間に、相互のコミュニケーションによって、共通イメージが生まれていくのである。つまり観察者も事実を踏まえながら、コミュニケーションを通して改めてイメージを構成していく。

イメージすることと事実との違い

話を聴いている他者がイメージを構成していく特徴は、どこにあるのだろうか。そのイメージは、話を聞いている他者に委ねられ、自由に構成されていく。一方、状況事実を観ていた観察者は、その保育者、周りのしつらえや明るさ、道具をはじめ、その幼児の声や表情、態度や動き、話の内容や話し方などその状況を構成する具体的な情報をもとにイメージしていく。しかし、話を聴いている者にとってのイメージは、これらの具体的な情報のほとんどが「想定」したものになる。実はそれらを想定できるからこそ、自由に構成し何度も頭の中でつく



り変え、繰り返し再生できるという効力があることがわかったのである。

ひとつに「見えの設定」を自由にすることが挙げられる。たとえば、幼児の視点になったり、他の幼児の視点になったり、保育者の視点になったり、客観的な神様視点に立ったりしながら、それぞれの"見え"や立場からのイメージを展開することができる。また、その視点を自由に移動しながらとらえることができる。さらに視点だけでなく、それぞれ登場する人物の性格や表情、声色なども想定していくことができるのだ。ちょうど映画の一シーンを観るように、映画監督やカメラマンのように構成していくことができる。さらに、他者とのディスカッションを通しても、これらをどんどん変えて構成していくことができる。それぞれイメージした状況をもとに、幼児や保育者の心情や考えを展開してくことができるのである。そしてイメージの中で設定された中に登場している人物の視点を移動したり、自分でなってみたり離れたりしながらとらえていくことができる。一つのシーンを多面的にとらえながら、そこでの事実と意味を何度もとらえ直していくことができる。

これらを繰り返すことを通して観察者は、幼児や保育者に対する見識を深めていくのである。ここでの再構成は、結果的に実際に起こった現象とは違った要素が含まれてしまうのかもしれない。しかしそこにはフィクションではない事実に基づいた現実性と解釈が存在している。

幼児を理解することのおもしろさ

さらに興味深いのは、幼児そのものの理解についてである。幼児がどんなことを考えているのか、観察していると不思議な感覚になる。つまり同じ人間であるにもかかわらず、はっきりした理解ができない場合がある。しかし全くできないというのではなく、できそうでできないのである。わかったかに思えるが、そうかと思うと手元からすり抜けていくような感じになる。観察している時、たとえ幼児にその行為の意図を尋ねたとしても、満足な答えが得られないと思われる。理解できないという

不満よりも、実はそこが何とも言えない魅力となり、観察者としてわかりたいという意識が生まれ、幼児への好奇心と探究心に変わっていくのである。

幼児は同じ人間であるのに、大人とは違った生き物なのだ。自分自身が幼児のころ何を考えていたのか、ほとんど覚えていない。しかし、観察者がおそらく、そのわかりそうでわからない対象とかかわり、そこからお互いが出会える時、つまり幼児を理解できたり思いが伝わったりするように思えた時、ある種の充実感と満足感が与えられるのではないだろうか。その出会いは、日々その幼児とのかかわりの中から、得られていくものと思われる。

イメージに基づいた洞察力と保育のデザイン

つかみにくくわかりにくい幼児だからこそ、自由度のあるイメージの力で構成していくことが適しており、効果的と言えるのかもしれない。そこにそれぞれ個人的な解釈を創り出し、それをもとに幼児にかかわっていくという、教育の多様性と創造性が生まれると言える。

一方、わからないからこそ、思い込みに陥らないよう、観察者同士もしくは保育の場では保育者同士のかかわりとコミュニケーションが不可欠である。そのコミュニケーションによって、保育者たちの間で幼児の行動や状態に関する情報を共有しつつ多面的で多様なかかわりをもった保育が可能になる。つまり保育者全員で幼児一人ひとりを愛でることが大切なのである。さらに保育者は、実践の中での観察者であり、それぞれがイメージする力をもって幼児や保育者自身が気づいてないことを含めて創造的に保育していくこと、つまり「保育をデザインしている」と言えるのだ。

観察に大切なことは、イメージしたことが事実に忠実であるかはもとより、ある事実を前にした時、イメージで再構成し、それを手がかりに現象をきめ細かく洞察力をもってとらえ、解釈できるような力を養うこと、それらを保育につなげていく発想をもつことなのだ。それを支えるのがイメージ力なのである。

（多摩美術大学）